宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 26番
定価 一年 送料共500円

潮（うしお）

まなかいに波濤の砕け散り、はるけきかなた玄洋を望む
その白泡潮となり　ひろがるところ神は鎮り座し　その果なき潮路を見看し給う
この潮路の逆巻くところ　これを「海北道中」と号く

論説

大学は出ないけれど

今春、学習院大学で十人の女子学生が落第して、卒業出来ないと発表されて問題になった。麻生学長は、落第は恥でない、大学は学問の研究を通して行なわれる人間形成の場であると、大学の本質論を強調したが、大学観を異にする落第学生とその母親たちが納得しない。概ね上流家庭が、家格の見え、就職結婚などの優位性紛飾、凡そ学問とは関係のない目的から、子女を入学させているのだから学長の落第解説の弁が、通じる筈がない。

就職がきまっていたのに、結婚の運びに疵をつけた、試験の成績なんかにこだわるとは何事か、などと迷門（?）婦人の連合軍は、喧しく大学当局を非難し、背後から加えられた権力金力の圧力は相当なものであったらしい。

大学という遊び場、特権優位の身分証明書を買うマーケット、そんな大学が多いことは世界一であろう。麻雀と俗歐の勉強、恋愛遊戯の研鑽、その水準だけは諸国に冠たるものがあるかも知れない。

カナリヤの歌うべき歌を忘れた有閑大学駅弁大学の将来、そこの高価なレッテルを頂戴して世に出るおびただしい大学出、これも我が道を歩み得ない出世主義ご都合主義に堕した戦後の国民の、悲劇のサイたるものでなければ幸である。然し反省清算の時期が来るであろう。必ずその時期が来る。

大学は出ないけれど、と語る或る母の述懐が胸をうつ。

ただいまと玄関をあけてニヤリとしているむすこの前に、おかえりと私もえがおで出迎えた。大学進学の希望だったむすこが就職して二十日目。初めての給料日。在学中は朝寝坊で遅刻組のトップに名を連ねていたのが、今は毎朝六時起床。弁当をさけて明るく出かけるむすこを送り出す時、どうかすると私の方が弱気になってしまう。健康を害した夫が就職してほしいと言い出したのが入試の一週間前。願書も整えて希望校への夢ふくらませている子供に、どう告げようかと心を痛めた。意を決して話し合った末、おやじの跡継ぎ引受ける、とショックを隠した顔で言った言葉を聞いた時、そうしてネ、と私の方が言葉にならず心の中でつぶやいた。

普通高校から工業系の職場への転向、職場も製作部門とあれば決して生やさしいものでない。けれどこの頃では仕事を覚えようと一生懸命がんばっているむすこに色々とアドバイスする夫。

いい製品を作るには、まず自分の精神の持ち方から学ぶことだ、などと言っているのを聞く時、社会人としてどうか立派に成長してほしいと願う。給料袋を仏さまに供えてかねをたたいているむすこ。「大学は出ないけれど」職場での勉強がんばってネと声援している。

以上が始めてもらった給料袋を、見守る母の真心の声である。大学に通ってはいるが漫画を最も愛読、大学は出たけれど葉書一枚ろくに書けない無能力、そんな例をいやと言うほど身辺に見聞する今日、現代日本の求めているのはこの青年この家庭この親子だと、その多幸健斗を祈る気持が湧いてくる。

当代の毒舌家を以って知られる今東光氏は、英国などに比べてあまりに多過ぎる我が国の大学、どんくつぶしてしまえとお説教。道理はある。学理の研究、人間形成のために、「いる大学」はなければならない。学歴の投資、出世の看板のために、「ほしい大学」はなくてよい。

それでも入試地獄だ、狭き門だと、大学へゆく能力も必要もない者たちが、大学の不足を嘆き、高い学資を費って目の色を変える。もとく学問が目的でない多くの学生は、どうにか入試の関門を通過すればもう安心、トコロテン式に卒業証書となる次第。よくアメリカは入試地獄がないとうらやむが、あちらは勉強したい者が進学を希望し、途中勉強しなくなった連中はどんどん脱落してゆく。我が国は勉強したくない進学希望者が多過ぎる点、外国と異り、ありがたくない今東光氏の毒舌拝聴となる所以である。

然し、いつの時代でも真理は社会の反省を呼ぶ。最近学歴年功の序列主義による賃金体制が崩壊のきざしを見せてきた。能力主義、実力主義をとる経営体がふえてきた。従って学歴年功の廃止を真剣に検討する企業もあって、実力主義による昇給昇進に重点をおく傾向が強くなりつつある。実力昇進の制度の採用は、躍進する会社ほど重視している。

大学は出ないけれど。よろしい、家庭の都合で学歴を握れなかった青年よ、謙虚にその能力を最高に発揮出来る社会への改革者となれ。人材開発は心ある指導者が、いづれの職場に於ても真剣に考えている主要命題である。

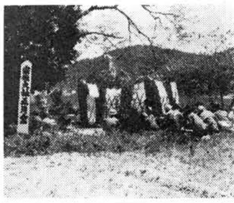
初夏を告げる
さつき祭

宗像の初夏を告げる「さつき祭」が恒例により五月五日に斎行された。

この祭は古くは秋の放生会に対して「五月会」と呼ばれ盛大な祭儀が営まれたものである。その内容は、五社の神輿（第一、第二、第三、織幡、許斐）が釣川の御前の浜（現在の東参道ロータリーの所）から御座船に乗り江口浜まで神幸式を行い川口の五月の浮殿に於て浜下りの祓の神事が行われたのである。その故事を今に伝え、毎年釣川を挟んで対する神湊、江口区の人々が参列し、先ず浜宮、次いで五月宮と祭典は行われるのである。

両宮とも祭壇には、古式により赤飯、菖蒲酒、粽が供えられ祭の古さを無言の中に示している。祝詞が完り、参列者により玉串が奉奠される。神湊子供会代表の小学生が玉串を捧げる、小さく可愛らしい拍手が後に続く、この「よい子」等は前日一日がかりで、この日の祭の為に浜宮境内一円の掃除をしたとのことである。

引き続いて五月宮祭が行われる往時の五月宮跡に青竹で垣を結い紅白の幕を張り廻らし神籬の前に祭壇を設け祭典を行う。眼下の釣川は初夏の日射しをうけてゆっくりと海に流れ込む、鯉幟りが風に泳いでいる。祭典が完ると祭場の前にむしろを敷き直会が行われる、方五寸の折敷に楢の葉を置き、その上に握り飯、がめ煮、なますが栗箸で盛り付けられる。緑の楢の葉が清々しい。これから昔人がそうした様にさんさんと降り注ぐ陽光のもとで人々は且つ食い且つ語り愉しい一刻を過すのである。



もとは農耕儀礼として始まったこの祭も時代の変遷と共に、ある時は諸社の神輿の集合する大神事となり、またある時はわずかな氏人によって祭儀が営まれたこともあった。その日に幾多の変遷はあったが、祭の純粋な精神はその中に脈々と受けつがれてきた。誰が教えたのでもなく、毎年この日が近づけば附近の子供達が集り、境内を掃き清めて神を迎える準備をする。そして彼等の祈る小さい拍手の音は、民族の信仰を世代から世代へと伝える大きな足音となって消える時がないのである。

人形祓の御案内

来る七月三十一日は恒例の夏越の祭りが行われます。

半年の間、知らず知らずの間に犯した罪、けがれを祓い清めて、新しい気持で出発する一つの折目でもあります。

大社では、崇敬の各位に人形祓いの御案内を差し上げる様に準備をしていますが、今月下旬頃にはお手許に届く事と存じます。

どうか案内状をよくお読みいただいて、七月三十一日までに御返送下さいませ。

宗像大社御用達
祭具、装束
結婚式場用品
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 八八六九・九三七二番
振替口座京都 一五八九一番

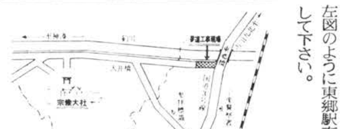
参拝道路迂回のお知らせ

国道三号線から宗像大社への参拝道路は、宗像町東郷の東郷駅東口附近からと、東郷橋河畔からの二車線があるが、東郷橋線が工事中で、通行止となっている。

工事は、丸二屋橋の掛替と道路部分舗装で、舗装工事は六月上旬乃至、七月下旬には終了の予定である。

近い将来には国道三号線より当社まで全面舗装される見通しである。

舗装期間中、東郷橋線は片側通行となるので、北九州方面から御参拝になる方で急がれる方は左図のように東郷駅方面から迂回して下さい。



阿蒙少言

旅は教室である「僕らの少年の頃、大きな飴玉があった。一個五厘」と車中の七十翁。対坐する学生「今でもあります」と反論してあるなし問答の挙句、五十銭銀貨は見たことはあるが、他の銀銅貨は知らないと、学生は明治の小銭に兜を脱ぐ。「これはスイスで買った時計で五十円だった。」と文化財的懐中時計が顔を見せる。洋行したことがある証明に、学生いささか敬意を表する。飴玉論から物価論へと、老若の知らぬ者同士の対談を傍聴して教えられるところもあった〇旅は禅堂である。世の種々相を見せて思索させる。金髪の若い女性が、日本流のネンネコで赤ん坊を背負ってゆく姿、ほほえましい、夫君に荷物を持たせて、スタイルを気にしながら歩む日本女性は、お気の毒だが美しくも見えないし、後に従う婿君の月給で買った折角のドレスも、無作法が帳消しにしている。この観察は悟りの中には入らぬと、導師の痛棒をうけた〇旅は極楽である。筑後のある寺にヒステリーの治るお札をうけに行く老婆二人。弘法大師はさすがに名僧、昭和世代の家庭の悶着を円満解決する霊験を伝えている。「下からゆけばわがまゝ一杯、上からゆけばヒス」と老婆の嘆きの対象たる若嫁は、大師のお札で済度される人間像であろうか「極楽は若嫁の不在中」との感想は、先方も亦同じ。天に声あり「地獄は近づけり、汝らそれ悔い改めよ。」と〇旅は劇場である「かわいゝ子には旅をさせよ。」と昔の人は言ったが、浪費無軌道、はては補導保護と称する非行の武者振りを演ずる。他人の演出を見物する分なら、かわいゝ子の修業ともなろうが、レジャーブームのマスムード、そうはさせぬ「かわいゝ子には旅をさせるな。」

（白　雲）

宗像大社献詠歌会詠草

五月八日　於社務所詠草到着順

大濠　江崎　琴子
宿痾もあるじと待ちし春のきて今朝おとづれし鶯のこゑ
（鶯の初音をきゝて）

福岡　高橋　昇
老ひぬるか孫が小疵に心やゝ病む我が其年頃は剛気なりしに

香椎　織田　橡雨
死を賭けて美田を作せし五庄屋を神とぞ斎く祭りたふとき
（筑後水神社の報祭に思ふ）

福間　井原　元彦
入歯をばはづして洗ふ我にならい妻も洗えり老いいたるかな

大井　村山　幸生
からみつき太る藤つる断切れば言わぬ立木に声ある如し

原町　八波　五月
朝な朝な神に捧ぐる拍手に心引きしめ和をつみ行かむ

厚狭・篠田　南洞
帰り来て床の活花変りいるそのひとゝきを妻と笑み合う

宗像　石松や寿子
神々にかけし願のいれられて末なる甥も宗高に入る

飯塚　萩本　夕照
春嵐朝より吹きて境内の楠の落葉の音立てゝ舞ふ

和布刈　永島　まち
植えおきし君がかたみの岩八手丹頂の名に恥じず咲きおり

村山田　吉田佐市郎
壮健と人は誉むれど寄る年に僅か動けば疲れ覚ゆる

宿谷　吉武　武雄
昨日今日変り行く世に変らじと神をおろがむ姿尊し

宗像　井上陽之助
かねの音は花より花にわたりつゝ春深みゆくふるさとのやま

遠賀　長畑　房江
雨になりし病舎の日暮瓶に挿す山梔の実のかたく閉居り

宮田　北原きみ子
山里の友か持ち呉れし錦木は青く芽吹けりさし木にてあれど

〃　片山　一
歩み来て小川は近し雨あとの水の激ちか間なく聞こゆる

吉田　占部　由久
たどたどしき文字も添えて小学校へ上りし孫の写真送り来

福岡　林　まつえ
釣川の原流といふ小流れに草の葉流しつ石なげて見つ

コロラド　浦野　薫
きつつきのしわざ静かに見守れば吾れに気づきて飛び去りにけり

名島　久保　房江
揚げ潮に貝を洗ひて家づとの荷は重けれど心は軽し

戸畑　伊規須ゆき
朝あけの重なる山に靄こめて遠きまろ山小島のごとし

勝浦　永島　計七
青春の夢はるかなる老いぼれて酒量減りたる同窓生の集い

東郷　藤崎　辰子
ホッチギスで綻びとめし学生と並びて里のバスに揺らるし

田熊　小野　花居
麗日に桜花爛漫空碧く今日を盛りと咲き匂ひけり

〃　小野角次郎
暖冬の桜は早し新ランド列ぶ校庭碧空清し

勝浦　永島　桂翁
新しき望みわくらん子等は皆胸を叩いて学び舎へ行く

田島　白雲　山人
妻をもむ子の逞しさ見るにつけなつかし母の肩もみし日よ

大井　木原　房子
新緑の八木山峠しばし佇つ妹います町淡く霞みて

宮司　新海　邦男
春雨に濡れて宿りし軒下にほのかに聞ゆはるさめの曲

大井　安部　重郎
夏寒き二字国俊の匂ひ冴え姿美し鋼の芸術
（黒田展にて）

〃　安部　静子
若人の希望にも似て大楠は高くそびえて若みどり萌ゆ
（大宰府にて）

〃　吉田　杏子
峡の径登りゆく時ほゝじろの友呼ぶ声か囀り高し

勝浦　永島　文子
両端を些少残して貫通す新産業路の杭白々し

吉武　原田　松代
咲き満ちし菜種畑にたわむれて二つの蝶が追ひつ追われつゝ

（四頁へつづく）

宗像談話室　神道を行じて五十年

―片岡責任役員訪問記―

全国の旧官国幣社に巡拝しようと決心したのは、大正十二年関東大震災の秋であった。

明治神宮を第一社として、内地はもとより、朝鮮、沖縄、台湾の海外神社へも渡拝。漸く昭和三十三年十月二十五日、出羽三山の一、月山神社を以って念願は達成された。

巡拝したお社は二百十社、実に三十五年間に亘る信仰の行脚であった。

当時を回想しながら淡々と語る片岡道信氏の衿元を窓外の涼風が静かに撫でてゆく。

氏は、土佐高知の出身。大正七年、知人の勧めで八幡製鉄に入社同じ頃入社された安永渡平翁の片腕となって活躍され、八幡製鉄の課長を歴任、昭和十八年、八幡港運の重役を経て社長に就任。不況時にも良く社運を伸ばされた。

この重責の余暇を裂いて各神社に参拝された努力は、讃うべくして行い難い敬神の熱願による。

参拝の折蒐集された絵葉書は、「神光余影」と題してアルバムにし、浄紙で綴った朱印帳は「稜威の御光」と名付けられ、祭神名、所在地、由緒、沿革、神社建築、特殊神事に至るまで毛筆で丹念に書き込まれ一切が網羅されている。

一念発起を其の誌に述べて曰く「敬神崇祖を以って生活の根本義となし、自ら謹みて行住坐臥念々一に信敬を以て貫き、またこれを庭訓となしたは、思えば遥かに遠い若年の日であり、この信条に基きこれを形象の上に定着せんとして全国津々浦々に奉祀する神々を巡拝し―中略―寸暇を惜んでは神々の大前に額づき、心中清風を以って洗われるの思いを重ねて行った。神に帰一し、清められたわたくし自身を見つめつつ歩み来った三十五年間の旅路こそは、即ちそのままわたくし自身の半生の内容を形成しているのだと思う

この三十五年間は大正から昭和への二代にまたがり、その間日本は前后未曽有の大戦に捲き込まれ、惨澹たる敗戦の悲運にも遭遇した。当初わたくしが慨歎した世情の混乱は、敗戦とともに流入したアメリカニズムによって、新たな形による思想混乱を餘儀なくせられた。旧来の権威はすべて否定せられ、物質と現世の外はすべて棄てて顧みられまいとしている。しかしわたくしはそれらの迷謬はやがて人類を崩壊の方向に導くものであることをここに明確に誌しておきたい。物質の根元としての自覚、現世の源流としての祖先への回帰崇敬こそは、己れ自身を確立し人類の永遠の繁栄を不動のものとする根底であることを確信する。」

このあとがきに依っても、氏の半生と其の心構えが伺れよう。三十五年間の足跡を一冊に纏めた写真帳、朱印帳は事前の綿密な計画と忍耐の歴史であると言っても過言ではない

風雪に耐えられた氏の半生は、波乱万丈の絵巻ではない。戦国時代槍一筋で国守となった英雄の物語りでもない。地味に確実に注意深く人生の高嶺を踏み分けた登攀の記録である。戦国乱世に生きた英傑の気慨は勿論持って良い。然し、確実に自己の職責を完うする事は、何時の世にも求められる第一のものではなかったか。

氏の座右銘は「知足安分」と言う。「老子」に「足るを知る者は富む」と有る。足るを知り、其の分に安んじると言う事は、欲求過剰とも言える現代、一層味いを深くする。この心構えを、或る新聞は「人間を、貪欲と増上慢から救い出して、謙虚と感謝に指向させるところの貴重な「人間の生き方の姿勢」というべきである。」と報じたが、氏のこの生き方の姿勢こそは、各社巡拝の内に培かわれた、否神から授けられた賜物と言うべきであろう。去る六年前、現宮司赴任当時、当大社は多大の借財を負っていた。

これを返済し現在の興隆に導いたものは、宮司、職員の努力もさる事ながら、氏の陰ながらの示唆に負う所少しとしない。

先年、氏は数々の公職を辞され、当社責任役員だけをそのまゝに、悠々自適の日々を送っておられる。

訪問者の不躾な質問に柔和な老顔が綻びる。七十二才の年令を寄せつけぬ頭脳の冴えと博識が、眼鏡の奥でチラリと光る。

「宗教は知識でなく、体得し行うもの、人生への態度を指すのでしょう」淡々と語られる敬神のまごころに、深い感銘を受けて辞去した。

×

×

一切経一部修理終る

―京都から宗像大社へ―

当大社宝物館に保管されている重要文化財色定法師一筆一切経四、三三一巻の保存修理が、昨年より施行され第一期の修理が完了した。今回は経巻九五巻の裏打ち、並びに保存箱四個が製作され、去る五月六日宝物館に搬入された。

一切経は、鎌倉時代に当社の社僧であった色定法師が文治三年(一一八七年)から四二年の歳月を費し、唐本一切経を原本として、五、〇四八巻を書写した我国唯一のものである。現在四、三三一巻が保存されているが、この経巻は今から約三〇〇年前に博多聖福寺で修理し、当社の経蔵へ納められてあった。

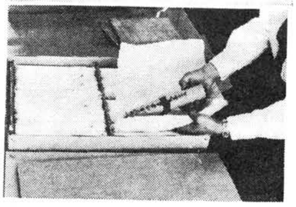
以後全巻にわたり、虫害、濕気による腐蝕、又中軸の欠失したもの等甚しく、完存するものはほとんどない状態であった。

今回は三百年ぶりの大修理であり、写真で見るように腐蝕部分の補修、虫穴を一つ一つつぶす作業、さらに全体の裏張り等と、手数の込んだ仕事で、今後完成する迄には二十数年の歳月を要する見込みである。

この経巻類の修理の実際が写真で送られて来たので紹介する。

虫害等で破損した経巻をまず、水溶性樹脂で止めて墨散りを防ぐ次に仮り打ちして、折れ目等を伸ばす。

(次々に搬入される経巻の梱包)



次に裏から十分に水刷毛で水気を含ませ旧裏打ち残を除き易い状態にする。

表から打った薄紙は水気で透き通っている。

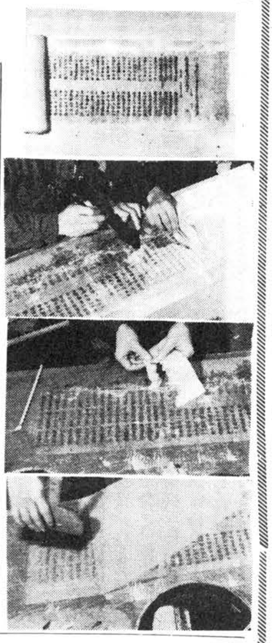
旧裏打ち残除去

水気を含ませ乍ら、残の繊維を残さずに除く。

裏打ちを除いた後、欠損の部分の補修

裏打ち残を張る。

(修理された経巻を拝見する。)



六月のまつり

六月　一日　十五日

月次祭　午前十時

月次祭は中世の頃には、六月、十二月の十一日に神祇官で行なわれた祭儀で、一年を二回に分ち、奉幣を行なっていたが、本来は毎月奉るべき幣帛であるところから、月次祭というようになった。

神宮を始め、全国の諸神に幣帛を奉り、国家の平安と皇室の御安泰、広くは万民平和幸福を祈る祭りである。

わが国始まって以来、数千年の間、連綿として続けられて来た重要な儀式であって、当社も本来の儀式にのっとり、毎月一日と十五日には月次祭を行なっている。

六月の交通訓

○安全へ一秒一歩のゆずりあい

宗像大宮司　氏貞公墓前祭

さつき晴の五月六日、宗像大宮司氏貞公の墓前祭が斎行された。

宗像郡玄海町上八の小高いところに祭られた氏貞公の墓前は、早朝から地元婦人数名の奉仕によって掃き清められていた。

当日午前十時、当社の宮司外、祭員二名によって祭典が行なわれた。氏貞公が逝去されて以来、三八〇年、墓石は長い間の風雪にさらされて、亀裂を生じ、裏面に刻まれた文字など見る影もないほどに風化され、わずかに氏貞公逝去の「天正十四年」の字が見える。

墓の棹石、高三尺、巾一尺三寸、地輪石高三尺五寸、塚の石垣横三間、入四間となっている。

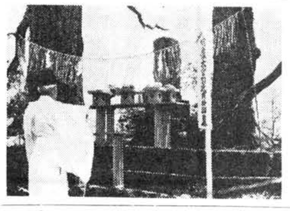
墓の囲りには、数百年の年輪を誇る老松が風を受け瀟々と鳴り続けている中で、祝詞が奏上された。

―此の奥津城に鎮り坐す言巻も尊き宗像氏貞公の御霊の御前に恐み恐みも白さく。

今年はしも公の神去り給ひてより以来三八〇年とは成りぬ故れ此を以ちて里人等相寄り相議り、今日を吉日と撰び定めて御靈和めの式執行はむと―

宗像大宮司家の棹尾に傑出した大丈夫四郎氏貞公は、戦国乱世にあって宗像郡一円をよく治めた。

在りし日の遺徳を偲んで、墓前祭は終了した。



(写真は祝詞を奏上する久保宮司)

社務日誌抄

五月一日　月次祭　午前十時斎行。五月晴れで参拝者多し。

五　日　浜宮、五月祭斎行。子供祭拝殿に於て斎行。

六　日　田島幼稚園児二十名参拝、一切経一部修理され宝物館に搬入さる。

八　日　浜宮境内林下枝切り、地元総代奉仕によって終了。

責任役員会開催

―昭和四十年度　決算承認さる―

すがすがしい初夏の五月十八日全二十日に宗像大社責任役員会が大社で開催された。

当日出席された責任役員は、片岡道信、吉武儀市郎、立石昇、妻野時雄、河辺嘉十郎、力丸市尾の各氏六名であった。

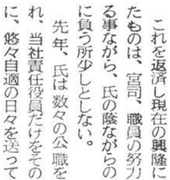
まず久保代表役員の挨拶、続いて昭和四十年度宗像大社々務本局(辺津宮)、及び海洋分局(沖中両宮)の歳入歳出決算報告について審議応答があった。

この歳出内容で一際目だつのは海洋分局に於ける本局からの補給金が少なく、海洋分局の社入金が増大しており、三宮共に益々発展している様が伺える。

次いで、氏子会の歳入歳出決算報告書が審議された後、立石役員から〃去る十八日に吉武氏子会々長他、各監査員で監査した結果、諸帳簿の記帳他、領収証も正確に整理され、且亦、予算、決算書を検討するも実に充実した予算を組んである。〃との報告があった。

尚、最後に久保代表役員から当面の社務現況報告があり、出席役員全員の承認を得て、無事閉会した。

宗像大社御用　綜合印刷
有限会社　大和印刷所
宗像郡宗像町東郷　電話　宗像局2027番　有線277－1番



宗像四郎氏貞　(三十七)

山下半可　作
福田長庵　画

厳島合戦　㈠

江良丹後守興房というのは陶入道腹臣の智将であった。彼はさきに陶が筑前宗像を取り仕切るについて、度々宗像に使者として下っている。

宗像の家臣吉田弾正忠重致という者の相続の件について揉めた時に、大宮司氏貞が裁決を下したことがあったが、この時陶より氏貞に対して「御裁判の趣、尤も然るべく候」と確認書を送っている。この時の使者が江良丹後守であった。

去年の五月、陶は石見津和野の吉見正頼を攻めた。吉見はもと大内義隆の武将で、これも反陶派であった。

津和野を攻めている陶の背後を、毛利が脅やかした。陶は中国の覇権を掌握して以来初めての苦汁をなめさせられたのである。

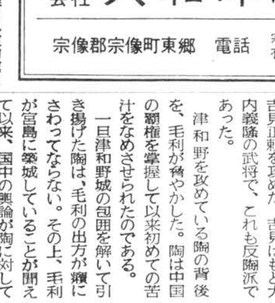
一旦津和野城の包囲を解いて引き揚げた陶は、毛利の出方が癪にさわってならない。その上、毛利が宮島に築城していることが聞えて以来、国中の輿論が陶に対して批判的になっていた。これもまた陶の立場を不安定にした。今となっては陶は是が非でも毛利を倒さねばならぬ立場になったのである。

九月、陶は大軍を擁して岩国城さして進軍を開始した。そし別動隊が折敷畑山迄進出した時に、元就軍が打って出た。毛利勢は陶の主力をはぐらかして、この別動隊を全滅させた。これが陶方の致命的な傷手となった。戦争というものは、時として一部の破綻が全体の敗北を招く。今度の場合がその良い例であった。

さて、江良丹後守は陶方の最前線である岩国の城主であった。主人陶入道が最近度々敗北しているので、或る作戦会議の席上で、彼は陶に進言した。それは、戦場に於て多数の流血のはてに勝敗を決するのは、戦術上必ずしも上策ではない。特に近頃は牒報戦が盛んである。巧妙なる計略が、時として数万の軍勢にまさる効果をもたらすことがある、というのであった。陶もこれには同意した。では誰を派遣するかと詮議した結果、陶の相伴衆の天野慶安という者に命ずることになった。

これが、提案者の江良丹後守にとって命取りとなり、その結果、陶の破滅をも招く結果になろうとは、神ならぬ身の彼にも予想できる事ではなかった。

慶安は陶に呼ばれ、役目を仰せつけられた。慶安は、自分は適任ではないからと辞退し続けたが、終いには恩賞に釣られて承諾した。



芸州に乗り込んだ慶安は、しきりに陶の不平を鳴らした。毛利方の家臣がそれと元就に注進した。

元就は慶安を引見して、一目で間牒であることを見抜いた。そしてわざと彼に同情の言葉をかけた。慶安も裏の裏までは見通せなかった。滔々と、使命とするところを述べ立てた。すなわち、去る折敷畑山の敗戦によって陶は著しく戦力を失っている。今が逆臣陶を征伐の好機である、というのであった。これを聞いた元就が、大仰に喜んだ。

「近頃世間の民心が陶から離れていると聞く。そこもとの云う通り、畑山合戦の結果、陶の戦力の回復せぬこと、さもあろう、その上、陶の腹臣までが離反しているようじゃの。先頃、江良丹後守が当方に内通して来たのもその現われと云えようのう。」

これには慶安が驚いた。

慶安は急ぎ山口に取って返し、かくと注進した。これで間牒慶安は完全に元就に繰られてしまった訳である。

江良は陶方の猛将である。江良を消すことは毛利方の大きな目的の一つであった。

入道はすぐさま丹後守父子を呼び寄せた。何も知らぬ丹後守こそいい迷惑である。そして、そこで弁明すればする程、効果は逆になって行った。丹後守は、沫殺された。

毛利は手一つ下さずして、口先だけで陶の片腕をもいだ訳である。

宮島では、毛利方の築城工事が進んでいた。弘治元年はかくて運命的な年となって行ったのである。

さきに、これも毛利に内通したと云われる己斐豊後守と朋輩の新里宮内少輔が兵五百と共に宮島の弥山に宮尾城を築城していた。工事は急速に渉り、陶にとっては、此れを放って置くことは、既に面目の問題に立ち至っていた。

毛利元就は屡々宮島(厳島)の厳島神社に参詣した。彼がここに参詣したのは幼い時からのことで、祈るところは常に「天下の将軍」になることであった。近頃は豊後守らの築城している城廓の検分と激励とを兼ねて参詣することが多くなっていた。

ここで元就が言明したことがすぐさま陶入道の耳に入った。

「宮島に築城したるは、われらが誤りであった。万一大軍がここに渡ることがあらば、弧立無縁、何条たまろうや。勝算なき築城をなしたるは、われらが不覚これに過ぎたるものなし。一大事なり。」

これを伝え聞いた陶が意気込んだ。

「宮島を陥とせ」　(つづく)

昭和四十一年度

宗像大社奨学生決まる

余寒なお去りやらぬ二月十二日昭和四十一年度宗像大社奨学生候補者推薦の郡内中学校長会が行なわれ、又四月に入り、これら郡内中学校より選ばれた、高校進学者の内より、運営委員会により詮衡会が開催され、十二名の新奨学生が決定した。

この奨学事業は、既に御承知の如く、皇太子殿下御成婚を記念して始められたもので、学業成績の良否、父兄の財力の有無に関係なく、より良き日本人　郷土の先駆者となるべき資質を有する人材を規準として選定している。

因みに、宗像大社奨学資金運営規程の抜萃を紹介すると、

第一条　本規程は民族伝承の美風を昂揚し、郷土の人材育成に貢献する趣旨により設定した宗像大社奨学資金の運営に関する大綱を定める。

第二条　資金は当神社の育英事業と協賛するため奉納された篤志家の浄財をこれに充て資金より生ずる果実を奨学金として給付する

第四条　奨学金は宗像郡出身にして高等学校、又は、これと同等以上の学校に在学する学生生徒に給付する。　以上

運営規程の一部であるが、奨学金返済の義務はないのである。

花の四月二十九日、天長の佳節に総社拝殿に於て、新奨学生の奉告祭が厳かに行なわれ、並居る参列者の前で、各人の名前が読み上げられ、それ〴〵選定書が手渡された。

高校の制服姿もりりしい若人等の容貌に、いやまして向学に邁進する決意がはっきりと見受けられた。

皇太子殿下御成婚をトして発足したこの事業も、当初は各中学校一名で、毎年計六名の予定で発足したが、中学校の要望で一昨年より、男女各一名づつの十二名に倍増し、本年又社会の諸事情に鑑み、新奨学生より五百円アップの、月壱千五百円の支給金額を決定した。

昭和三十四年春より、この事業に対する御協賛の寄附を社頭に於ても、又郡内外に於いても各位に依頼して来たが、未だその目的額の一部にすぎず、現在のところ社費にてこの運営に当って居る次第である。

玆に篤志家各位の御理解と御協力とを御願申上げ、協賛の浄財が大小となく寄進され、蓄積されて、やがて大いなる育英の花と開き、神恩の恵沢に浴した学徒が将来、政治経済将又文化教育等の多方面に亘って数多の星と輝き出る日を想う時、この企図に限りなき喜びを禁じ得ません。

庶幾くばこの趣意に多大の御協賛を賜らんことを誌面を以って御願い申し上げる次第であります。

（懇談する奨学生）

尚本年度奨学生は次の通り

次郎丸多美子	宇美商高
小林　義昭	香椎工高
升崎　成栄	古賀高校
幣　　款	宗像高校
山崎　清美	香椎工高
古田　国子	宗像高校
花田　明美	古賀高校
藤本　重行	水産高校
宮脇　葉子	宗像高校
岡田　久次	宗像高校
深町　計徳	水産高校
越智　真知子	香椎高校

以上

宗像神社史下巻　校正進む

去る昭和三十六年三月に宗像神社史上巻が刊行され、戦後の神社史としては全国一のものとして斯道に大きな役割を果したが、これに引続き下巻が執筆され、現在順調に校正が行なわれている。

上巻は第一章の序説から初まり、第七章の摂末社迄となっているが、今回執筆された下巻の大要は次の如くである。

第八章　祭　祀
第一節古代、第二節中世、第三節近世、第四節現代、第五節結語
第九章　神　職
第一節古代、第二節中世、第三節近世、第四節現代
第十章　氏子・崇敬者
第一節古代、第二節中世、第三節近世、第四節現代
第十一章　神階・社格
第一節神階、第二節社格、第三節現代の神社制度と当社
第十二章　崇敬
第一節朝廷の崇敬、第二節武門の崇敬、第三節学者、文人の崇敬、第四節一般民衆の崇敬
第十三章　社領・経済
第一節古代、第二節中世、第三節近世、第四節現代
第十四章　分　祀
第一節分祀の概況、第二節顕著な分祀の例
第十五章　神仏交渉
第一節古代、第二節中世、第三節近世、現代
第十六章　海外交渉
第一節古代、第二節近世、現代
第十七章　文化財
第一節建造物、第二節宝物、第三節古文書、記録、第四節考古学的遺物、第五節天然記念物。

以上の要目により執筆され、この他に五十枚の図版が挿入される。また判型はB5判で九九〇頁、一五〇〇部が印刷され、今秋には発刊の予定である。

この神社史は、宗像神社復興期成会（会長出光佐三）の編纂によるもので、去る昭和十七年に計画されて以来、実に二十余年の歳月を費やして完成されるものである

尚すでに刊行された宗像神社史上巻、並に沖ノ島、続沖ノ島は、まだ僅かな残部がありますので、御希望の方は宗像大社文化財管理事務局に申込み下されば左記金額にて御頒ち致します。

宗像神社史	一冊	五、〇〇〇円
沖ノ島	一冊	七、〇〇〇円
続沖ノ島	一冊	七、〇〇〇円

宗像大社宝物館

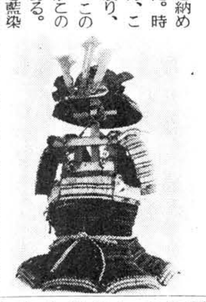
宝物を訪ねて

（重文）藍韋威肩白胴丸兜付（あいいおどしかたしろどうまるかぶとつき）

当社宝物館にある鎧は、建武中興で名高い足利尊氏の奉納にかかる。

尊氏は、建武三年（一三三六）新田義貞、楠正成など南朝の軍勢に敗れ、九州の地に逃れ、宗像一族の加勢を得ることゝなった。そこで尊氏は、宗像大社に詣で、自から着用していた鎧一領、太刀弓矢等を奉り、願書を納めて武運を祈願された。時に菊地の軍勢約三万、これを多々良浜に打破り、入京するに及んだ。この時、奉納された鎧がこの藍韋威肩白胴丸である。

藍韋威とは鎧全体を藍染めの皮紐で継ぎ、肩の部分を白く畢してある。



これと関連して沖の島出土品を見ると、短甲の滑石製品、更に桂甲の一部の鉄片等がある。

鎧の歴史は古く、古墳時代すでに短、桂甲の鎧を見る。これは中央アジア、朝鮮の騎馬民族が戦に使用したもの〻模倣と考えられる。短甲、桂甲の相違は、短甲が細い鉄板をビョウで継ぎ、固定化したのに対し桂甲は、鉄板を皮紐等で継ぎ合わせた活動的なものである。

平安時代に入ると、大陸の模倣から放れ、日本独特の美と威厳を持った大鎧へと発展して来た。しかし大鎧は馬上の武将の使用するものに相応しいもので、身分の軽い武士は胴丸、腹巻等の歩兵用の鎧を使用した。これらは美しく染めた皮紐、金銀の飾金具、工夫を凝した模様などで、全く日本独特のものとなった。大鎧は、義経の活躍した頃から鎌倉の末期まで使用され、室町時代に入るや戦が集団戦に変って来た為に全て胴丸、腹巻等の鎧の使用となった。

ここに紹介した鎧もこの胴丸であるが、兜、飾金具など、威厳と美的感覚にすぐれたもので、王者の使用した風格を持っている。また現在九州に残る最古の鎧に数えられている。

この後、胴丸、腹巻は西洋の影響を受け、鉄砲の使用から具足へと変った。具足そのものは華やかさがない為、兜にその意を凝し、清正、信玄のように美化された兜の使用となった。

日本原始美術展へ

沖の島神宝出品

去る五月十八日、福岡県文化会館より、日本原始美術展へ出品の為に、当社宝物を借用に関係者が来社された。

当社からは、金指輪を始め、金銅杏葉、鏡など、六十余点の国宝類を出陳したが、特に当社の沖の島神宝は五〜六世紀の日本国家形成時代、中国大陸と文化交渉を示す貴重な資料であり、歴史解明に重要な役割を荷負っている。

当社沖津宮斎庭は、当時の古代祭場としては、日本一の規模を持ち、日本の民族信仰である神道祭祀の淵源とも考えられ、当時の大和朝廷をはじめ、地方豪族の生活様式や、海外文化の交流を物語る貴重な神宝でもある。

この美術展は、福岡県文化会館の美術館において、五月二十二日より、六月十九日までに、福岡県並に、同文化会館の主催により、九州が大陸文化との交流において日本文化の発展に果たした役割を再確認しようと、九州を中心とした縄文、弥生、古墳の各時代の生活用品、祭祀遺物、装身具等の中から特にすぐれた作品の数々を展覧し、古代九州の文化的位置を示すと共に、日本美の源流をさぐり、現代にその意義を求めんとの新たな試みとして開かれた。

ここに出品されたものは、当大社の祭祀遺物をはじめ、北は東北地方出土の皿形土器、東京、京都の国立博物館、東大、京大、九大さらに福岡高校、又志賀島神社、若宮八幡宮等々九州南端に至る迄の貴重な国宝を展示している。

このように、日本の代表的な古代美術品を一堂に展示したのは始めての試みであり、これ程大規模な日本原始美術展は、かって九州で試みられたことはなかった。

開館は午前十時より、午後六時迄、入場料二百円である。

授与品紹介

キーホルダー

真珠は海の彼方の遥な潮の泡から生れると云う。

当社で先頃、参拝の皆様にお頒ちしているキーホルダーには鳥羽の海から採れた真珠をつけている。この形は、当社に由縁深い楢の葉を形どった竹に真珠を埋め込んだものである。

竹は古来よりその成育の良さから瑞象を表すものとして人々から愛されている。又その竹も吟味を重ねて京都山科の名竹を三年近くの月日をかけて乾燥加工したものを用いてある。その為であろうか此の種の授与品に多いヒビ割れ、きずつきは全くないといって良い大きさは縦四センチ横二、五センチでクロームめっきをほどこした鎖をつけた瀟洒なものである。

これに自動車のキィをつける。楢の葉を見て宗像大社を想い出し、真珠を見て清々しい気分に浸ることができる、参拝者の話によれば「アクセサリーとしても丁度手頃ですし、又交通安全のマスコットとしては最高ですね」とのことであった。

遠隔地に在って御希望の方は左記に申込まれたい。

初穂料三百円、送料五十円
福岡県宗像郡玄海町
宗像大社儀式課宛

龍宮祭斎行

大島の龍宮祭は快晴の五月五日、大島村長、漁協役員等多数参列の下に津崎の海浜に於て盛大に斎行された。

此の日は、丁度飛石連休と重なり、遠方からの磯遊びや、魚釣りの来訪客で何時になく賑ってはいたが、島中こぞっての祭日で、港内は百隻余りの漁止めの漁船が静まりかえっていた。

午前十一時、沖津丸が大漁旗をなびかせ、神職、参列者を乗せて出航、北西に進路をとり、龍宮社に向うも波浪高くして、上陸出来ず、船上祭を厳かに行った。

町村往来

◇家族計画と栄養講習会…6日午後1時半、玄海町地島泊公民館。家族計画講話のあと、手軽にできる初夏の栄養料理の講習。

◇秋芳洞など見学、宗像町南郷の宮田こども会は、5日山口県秋芳洞や秋吉台を貸し切りバスで見学。

◇福間町合同完工式…9日午前10時、福中体育館。下水処理場など四つの工事完工

◇交通安全ポスター審査…郡内各小、中学校生の作品を11日午前9時、宗像署で審査する。

◇ぞうきんを寄贈…玄海町玄海北校区（神湊）婦人会の大島やす子さんらは、ひとり2枚あてぞうきんをつくり、四〇〇枚をこのほと同校に寄贈。

◇海外派遣団員に八波さん…総理府と青少年問題協議会主催の第8回青年海外派遣団員に、福間町内殿の農業八波清文さん（二六）＝前同町青年団長＝が選ばれ、9月はじめから2カ月間の予定で北米地区へ派遣される。

◇大島航路増便…大島ー神湊間の村営大島航路は、夏季ダイヤに入って両港発最終便をそれぞれ一便ずつふやし、合計一日七便になった。増便したのは大島発午後5時50分神湊発同6時40分。

（西日本新聞より）

宗像伝説　其の六十一

きた

天明三年は天候に一大異変を来たした年である。

全国で干魃が続き、満足な収穫をなした者は少なかった。飢饉は奥羽より九州にまで及んだ。俗に天明の大飢饉と云われている。

この頃、本木村の百姓に藤七と言う者がいた。この藤七には子供が三人あった。上二人は娘で、末が男の子であった。次女をきたと言った。

きたは幼児の時から見目良しで十三才の頃にはめきめきと美しくなり、近隣の評判娘となった。

父親の藤七は持病の脚気があり、長年の無理が祟って、とかく床に伏せ勝ちであった。

藤七の父親の正助は、老いて益々盛んで農耕に精を出したので、藤七一家はかなり富裕な生活をする事が出来た。

天明三年、宗像郡内も干魃に見まわれた。正助は自分の田畑だけでも守りたいと思い、井戸から水を汲んでせっせと田畑に流した。其の甲斐あって穀類だけは何とか収穫する事が出来た。然し、この過労の為、天明四年、正助は他界してしまった。

姉十七才、きた十四才の時であった。父藤七は病床にあり、働き手は母と姉ときたの三人となってしまった。天明五年の春、姉は鼠に足を噛れてしまった。病状が意外に重く、あちこちの医者通いで半年を費してしまった。

きたは二人の病人と母と弟を抱えて一生懸命に働いた。肥え桶も自分でかつぎなりふりかまわず一生懸命働いた。

田畑のすきかえし等女の手で出来ない事だけを他人に依頼した。

秋の枯葉が落ちる頃、きたは村の共有林近くで薪を採っていた時何時の間にか境界を越えてしまった。運悪く村人に見つけられ、その償いとして、貢税運搬がきたに課せられた。

この時の貢は米で、福間浦まで牛馬に付出し、この浦から船に積み替えて福岡城下まで運ぶ事になっていた。

本木村から福間浦まで約一里半、日に二回の往復は、うら若い娘の足にはつらかった。これに加えてきたは、毎朝暗い内に起き、大根等野菜を畑より採って洗い、貢につけて商う事を忘れなかった。帰ってからは、草履、草鞋、縄や俵まで作って父母の孝養にはげんだ。

この徳行は近隣に広く知れ渡った。姉は病が癒えてから、津丸村の大家に奉公に上ったが、体が弱く使いものにならなかった。しかし、主人はきたの善行を聞き、この姉を帰したならば孝養の妨げになると心配し、かえって姉を養生させた程であった。

いつしか領主に聞え、その善行を賞して米七俵を下された。

時の感状に

きたと申すもの、幼少より生得両親に孝心厚く、身分化粧に構わず、山野に牛を牽て稼方懈怠無し、（中略）夜は相応の農業をいたし、母を助け、藤七薬用飲食起臥等に心を付け、介抱致候儀、曽而不怠。年若きもの殊に女の身分にて、孝心衆人に勝れ、其孝心善行、人をも感動令しむ、格別奇特のものに之有候段、御耳に達候。之に依り御褒美として米七俵下され候。此末弥相励み、尽孝養可申候事。

別紙御書付、天明七年未正月廿四日、郡方御請持、四兵衛殿より御渡し成され、相違す可き旨仰聞かされ候間、則ち相違候。

有難く頂戴仕る可き事
未正月廿七日
郡奉行　富永軍次郎

きた十七才の時の事であった。

（H）

生魚料理
玄海灘が一望される
岩風呂完成
みなと荘
宗像郡玄海町神湊
電話　神湊　五六番

宗像大社献詠
俳句作品集（四十二）

津屋崎　井浦　良介
五月の海へ海鵜は濡れし羽根乾かす

〃　久羽　文王
事務の娘の手おおいもせぬ大あくび

〃　西住喜三郎
からたちの棘柔らかき五月来ぬ

〃　占部　河童
芽木の天鯉の一群動かざる

〃　毛利　夜潮
野に麦熟れ太古の星のかぶさりぬ

〃　鶴　美津男
万緑が押しあぐロープウエイすすむ

〃　岩見佳代子
昏れなづむ休日苺の花白し

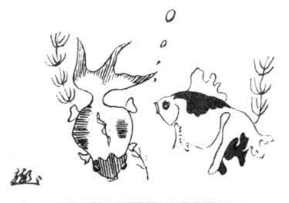
〃　白石百合蔵
芽木林透けて園児の散る駈け足

〃　小野　花居
卯月にも夏風来て炉辺を守る

〃　小野　淡坡
大卯浪大島今日も五月空

宗像　中野　きみ
〆鯖に妻の座しかと吾が娘かな

厚狭　篠田　南洞
生きていれば又時期となる木の芽和



日立と共に五十年（三五）

倉田主税会長の半生記

昭和二十七年、主税はアメリカの電機メーカーの一つであるR・C・Aと提携した。その技術を取り入れて電子管工業を本格化しようというのが目的である。

日立製作所が外国技術を導入したのは、創業以来これがはじめてではないが、小平が生前に〃日本人の技術〃を尊重し、極力外国の力を借りることを避けていたことは事実だ。それだけに彼は深く悩み、且つ考えざるを得なかった。

徹頭徹尾自力でやる――というのが創始者小平により培われた日立の伝統である。電気機械をつくり、電線をつくるにも、まずその工作機械からつくって仕事をした日立製作所なのだ。「いまここで、外国の技術を取り入れるのは、小平さんの遺志と反するのではないだろうか。名誉ある日立の伝統をゆがめるのではあるまいか」そう考えたのである。

然し、科学の世界は急速に進みつつあるのだ。技術の発展は日とともにスピードを増しているのだ。まごまごしていたのでは、科学の進歩、技術の発展について行けないおそれがある。「なるほど日立には立派な技術陣がそろっている。充実した研究所も持っている。伝統の精神にのっとって、自力でやれないことは絶対にない。」その自信は十二分に主税にあった。〃しかし〃と、彼は考えを新たにした。「しかし、うちの力でやってやれるにしても、これから取りかかるのでは時間がかかる。これが問題なのだ。せっかく研究が出来たときに、世界の水準がすでに先に行っているということは充分に考えなければなるまい。」たしかに、その不安はなくはない。日本はなんといっても戦争による大きなブランクがあるのだ。これは一朝一夕にしてとり戻しうるものではない。〃追いつき追いこせ〃といっても、追いつくこと自体が容易ではないのである。

「よしッ、地下の小平さんへの申しわけは仕事に成功した上で申し上げよう。」主税は、決然として踏みきったのである。

受信管、送信管、トランジスター、陰極線管、テレビ受像機等が契約の品目であり、契約の内容としては、特許実施権の許可と技術情報の提供ということが決められた。期間は約十年間である。この技術提携により、日立のこの部門における収穫はきわめて大きく、製品は一段と向上することが出来た。国内の販売高が激増するとともに輸出の増大が目ざましかった。「狭い国内で、無理な競走をするのは無駄である。技術の競争は大いに結構だが、日本の生きる道は、対外輸出以外にないのだ。機械の輸出を伸ばすのが、われわれに課せられた使命なのだ。」彼の信念は堅かった。この信念を貫くために敢て外国技術の取り入れを断行したのだ。そして、この決断の結果は、見事に実ったのである。

これを最初として、日立はどしどし外国の技術を受け入れた。原動機関係、重電機関係、車輌関係、通信機関係、家庭電気品関係、金属関係と、あらゆる部門にわたりアメリカ、カナダ、オーストラリヤ、西ドイツ、オランダ等の特許実施権を獲得したのである。しかし、取り入れるばかりではない。彼はすでにメキシコ、インド、アラブ連合共和国などの後進国に対して、自社の持つ技術を提供しているのである。

昭和三十一年、主税は新しい経営観点に立って電線、及び金属の両部門を分離独立させた。それ〲日立電線株式会社、日立金属工業株式会社となったのである。

日本産業構造の重化学工業化と、輸出の振興とは、主税の掲げる二つの旗じるしである。「これなくしては、敗戦国日本がふたたび世界の大国となることは不可能だ。」そう考える彼は、中心となる機械工業を振興するために業界の総力を結集する必要を痛感して、大いに各方面を説得して回った。

佐藤武三郎、石坂泰三、河合良成、池田亮次、岡野保次郎などが彼の趣旨に賛同した結果、昭和二十七年四月、それまであった機械工業連盟を発展的に解消して、日本機械工業会を設立した。二十九年には、これを日本機械工業連合会と改め、更に三十三年八月には一段と強化するために、社団法人に改組したのである。この間、彼は会長として終始組織の拡充強化に努力した。

同じ年に彼は東京国際貿易センター設立に参画し、更に日本電子工業振興会を新設して初代会長に就任したが、これらはいずれも、彼の念願とするところを実現しようとする努力のあらわれにほかならない。

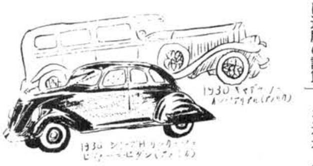
昭和三十四年、十月五日、彼は羽田空港から第二回目の欧米視察旅行に飛び立った。こんどは妻の信子を同伴した。

主税は、日立の社長として占領軍当局といろいろ交渉をしているとき、G・H・Qの要人たちと親交を結ぶようになり、彼らからしばしばアメリカ行をすすめられたが、彼はいつも〃いそがしすぎる〃といってことわっていたのである。実際のところ、社員の人達、特に技術関係者はどしどし留学させ、視察させたりしてきたが、彼自身はついにそれまで、外遊する時間的余裕を得られなかったのである。「自分が行くより、若い人達をやったほうが会社のためになる。国家にもプラスする。」そういう考え方も、大いに手伝っていた。

しかし、輸出のさかんになるにつれ、海外の得意筋からは熱心に来訪をすすめられるのであった。また、技術提携先に対しても、一度は挨拶に出向く必要も感じていたのだ。（つづく）　文責養父　守

あなたもラリーを！

ゴーストップや鉄道踏切などでは一時停車しなければならず、速度計だけに頼って走ったのでは計器の狂いも大きくだめというわけです。そこで時速30粁で走るには1分間に何粁進めばよいかを測定しながら走ります。コースの途中に前にわからないようにチェック・ポイントが設けてあります。その地点まで指示速度あるいは計算上、妥当な速度で走ったかどうかが記録されます。例えば指定の速度で走ったとき到着すべき時間が25分のところに第1のチェックポイントがあったとします。そのときその参加車がスタートから25分でそこに来れば、その区間の減点は0、これより到着が早くても遅くても1分につき1点ずつ減点されます。第1のチェックポイントで到着時刻を記入された上、更に進むべき方向と時速を指示され再びレースをつづけます。このようにして幾つかのチェックポイントを経てゴールに入ったときの減点がもっとも少ないものが勝ちです。毎年各地で行なわれているJMCラリーの優勝者は殆んど各区間を減点0で通過しているベテランぞろいです。搭乗者はドライバー（運転者）とナビゲーター（助手）との2人が1組になるのが原則です。ナビゲーターはスピードメーターの積算計と時計を利用して指定された平均時速で走るには1分間に何メートル進めばよいかを割出し、ドライバーに速度の調節をアドバイスします。コースがわかっているときは、地図を利用しできるだけ沢山のチェックポイントを予測して、その間のキロ数を調べ、そこを何分で走ればよいかを計算します。簡単なようですが途中で停止信号もあれば踏切もあり、交通の雑踏もあります。そこで遅れたのを取り返さないうちにひょっこりチェックポイントにぶつかったり、或いはあとでゆっくり調節するつもりで最初とばし過ぎているうちにチェックポイントを通過したりで、なかなかむずかしいものです。途中で時間を調節するために停車することは許されません。監督の立場にある審判車が絶えずコースを走りまたはどこかに隠れて監視しながら規則違反をチェック致します。主催側では他の交通の邪魔にならない範囲でレーサーの裏をかくような場所にチェックポイントを儲きますから、この予想の駆引きレースの面白さを増します。勿論、交通法規に違反したのがわかれば失格、チェックポイントに気づかず通りすぎてしまえば大量減点である。



高度のラリーになるとスピードメーターの積算計をぬりつぶしてレースをしますからいよいよむずかしくなります。

何れにしてもドライバーとナビゲーターの意見が合わなくて、喧嘩をはじめるようではとても良い成績はのぞめません。理想としては運転者のほかに時計・距離計などをチェックして計算する係（計算記録係）、道順を間違えないよう注意したり、昼食（おにぎり、サンドウィッチなど手軽につまんで運転しながら食べられるもの）湯茶などを運転中サービスしてくれる係など、3人から4人が適当といえますが、あくまでチーム・ワークのことを考えて遊ぶ必要があります。

②レギュラー・サーキット・ラン

1周何キロかの円周コースを定められた平均時速で走るラリーで、モンテカルロ・ラリーの第6日目の競技のやり方です。コースのキロ数を指定時速で割れば所要時間がわかります。スピードメーターは封印して見えないようにしてあるので、速度は勘に頼って判断するわけです。したがって日頃から自分の車をよく知っている必要があります。

× × × ×

――宗像藪庵先生百話――

南方華やかなりし頃

山猫

宗像太郎坊

わたしは動物が好きで診療の暇には、宿舎に帰って山猫の仔と戯れたものだ。この仔猫はわたしがコタチャネにいた時、土民より一円で買ったものである。一円といえば馬鹿みたいにみえるが、昭和十九年であり、その頃、スマトラでは一円あれば鶏の特大が買えたのである。土民の話によると、果物のドリアンを喰べに来て、仔を忘れて帰ったのであるという。日本の仔猫と大きさは同じであるが、違うのは、虎と同じように黄色い縞が幾つも入っていることである。躰が引締っていて、行動が敏捷、ぴょんぴょんと跳ねながら歩く。啼き声が、ニャーオンでなくギャッ、ギャッと可愛げのない声で啼く。喰物となるとまったく態度が豹変して、指にでも噛みつく。腹いっぱい喰べると機嫌がよくなって、腹を撫でたりすると私の指と玉を叩る。野性の動物をやさしくなるように育てることは、飼主の一番の楽しみであるが、物を喰べる時だけはどうしても野性に復える。だんだん大きくなって来たが、色や形が、豹を思わせ、初めての人は気味悪がって寄りつかなかった。首輪をつけて繋いでおいたが作業が終ってブランケジャランを去る時に、すっかり友達になったレマン君にくれてやった。

このほか、スマトラには、狸に似た顔の山猫がいる。ジャコウ・ネコ科に属し、熊猫といわれている。体長は約三〇糎、灰黒色の毛並に黒の縞が入っている。

徳山の動物園にいる筈である。日本では対馬に山猫がいる。天然記念物で、つしまやまねこといわれているが、明治三五年、猟犬が入ってからすっかり姿を消した。ところが昭和三五年二月、美津島町須藻の山奥で地元の山本源治（五四）さんが、罠で雌雄おのおの一匹をいけどった。二匹とも色は茶鼠で額に黒茶の縦縞が二本並行している。この山猫により満洲・朝鮮・対馬列島が陸続きであったことが立証される。標本は、東京国立科学博物館にあるが、わたしも一匹もっている。

世にも不思議なこと

ブランケジャランにある郡立病院の広い二部屋を借りて、オランダ人俘虜の入院室に当てがっていたが、スリンハー軍医中尉、ペルホース衛生軍曹のほかに、約三〇人の患者が入院していた。ここの牢名主に、ペルチェルというオランダ人の曹長がいた。なかなか面白い男で、奥さんの写真を大切に持っていたが、みるとその下敷きに厚さ一寸ぐらいの板を当てがって、写真がいたまないようにしてある。わたしはおかしくて吹き出して了った。なかなかの美人で曹長には過ぎた女であると思ったが、彼がこの女は美人であるが、家柄が悪くて、未だに両親が結婚を認めてくれないといった。女をくどくこともうまいらしい色男で、アムステルダムの大学に通っている時、自転車で帰っていると、女学生達が家の窓から、お出でおいでをしている。中に入ると女の方からの懇望で、両腕に一人ずつ抱いて遊んだと語った。ある時、わたしは非常に酒に酔ったが、山の中で行く所がなく、この病室に入って、ペルチェル曹長のベットに潜り込むやいなや、ぐうっと睡って了った。戦争中、敵国人と一緒に寝るというようなことは、外国ではない事と思う。前後不覚に眠っているので首を締めて殺そうと思えば、いつでも殺せるのである。

わたし達が戦後抑留されている時、われわれのベットに入って寝るような気の利いた白人兵は一人もいなかった。もし、いたならさぞかしみなの人気を博し、万事がスムースに行ったことだろう。

ペルチェル曹長は、ベットの下に鶏の雛を一羽飼っていた。こちらの住民は鶏を放飼いにしているので、時々まぎれ込んで来る。それをうまく手なずけて、夜はベットの下に来て寝せるようにしている。鶏の奴、知らぬが仏で「お前は大きくなったら喰べるからなあ」である。これよりまだひどいのが世間にはある。日本人の戦犯で、死刑を宣告されているが、病気で入院している者に「お前は病気が治ったら死刑にするからなあ」と、白人の国は非常に人道的であるから病気の間は、絶対に死刑を執行しない。本人にとって、これくらいはりあいのない病気療養はない。永遠に治らない方がましで、良い薬は人殺しである。

ある時、ペルチェルが同室の某曹長と喧嘩を始めた。こんな風だから、どちらも病気の方は大したものでないことがわかる。働きたくないので、仮病を作って病室に頑張っている。見るとペルチェルの方が下になっていたが、離れると、上になっていた方の曹長の首が右に曲ったままになっていて、元に戻らなかった。なんで喧嘩したかと聞くと、数学の問題の解き方で、お互いに自分の出た大学の方がいいんだと言い争って、ついに格闘になったということだ。しかし本当は牢名主の勢力争いで、このことがあって片方の曹長は早々と作業場に引揚げて了った。

（一頁よりつづく）

吉武　原田　リノ
吉と出しみくじはうれし叮嚀に折りてお庭の梅に結びぬ

津屋崎　麦野　時雄
黒川のいでゆの宿は「山彦」と名も山なみのながめひなびて

武丸　立石　昇
麦畑の青き広野のそが中にビニールハウスの白きが続く
（筑後地を行く）

武丸　立石ろせの
黄の波を立てゝ過ぎゆく春風菜種畑はたわに揺れ居り

戸畑　田中ハッセ
博多弁昔のまゝのクラス会友の頭に白髪目たたつ

福間　森　八蔵
十返りの花咲く朝のほとゝぎす残れる月に一声ぞ聞く

深田　中野　節子
久々に明日は夫と出て行かむ鬚そりの音湯殿よりする

田島　楠本　正
青梅を今年はつねより少しとつぶやく嫗に夕月淡し

我楽苦多告知板

○白と黒のツートン屋根にピカピカ赤いのを付けた乗用車。これに追突した軽自動車の運転手、降りて来たいかめしいオジサンに向って言った。

「君の運転はなっとらんね、みてみろ、俺の車はへっこんで、君の方は全然傷ついておらんじゃないか、どうして呉れる！」「………」

○校正余話、本紙昨年六月号「日立と共に」の末尾に「緊褌一番」とある所を「悲褌一番」と誤植。

校正子嘆いて曰く「あゝ、悲褌十年一剣を磨く」これには事務室中大爆笑。